

学部生対象「課題探求実践セミナー」において

教職大学院の現職派遣院生が講話を行いました。

(令和2年10月23日(金))

教育観や子ども観について、自分の実践や体験をもとに3人が語りました。

小学校については、山崎弥生さんが、社会人として必要な力と教員として必要な力についてリンクさせながら、子どもに寄り添った指導などの体験談と共に語ってくれました。小学校での教育の結果は、すぐに表れるものではなく、8年後に表れるので、焦らずに取り組みましようと言ってくれました。



中学校については、楠目安由さんが、好きだった理科が分からなくなったという経験が理科の教員をめざすきっかけになったこと、教員になって最初の授業での失敗や気づきが今の教育観に繋がっていることなどを語ってくれました。様々な実態の生徒に対し、分かる授業、理科室の掲示物の工夫をすることで生徒の意欲を引きだしているという実践の紹介もありました。最後に、学級担任として大切にしていることを語ってくれました。

特別支援学校については、前田正博さんが、児童生徒の「できないこと」に着目するのではなく、「何ができるのか」「どのような支援があればできるのか」というできることに着目すること、強みを生かして弱みを克服することの大切さを教材も交えながら語ってくれました。



受講学生は、メモを取り身を乗り出して教育現場の具体的な話を聞いていて、真剣な眼差しを強く感じました。

質疑応答

質問1. 大学院に来て学んだことは何ですか？

回答1. 多様な校種の先生方と一緒に学ぶことで、これまで交流することができなかった支援学校や高等学校の先生方から、教育への取組を情報交換することで、新しい考え方を得ることができたことです。

中学校では、来年から新学習指導要領が完全実施となり、指導法が大きく変わります。これまでの授業を振り返るとともに、新しい指導法を学んでいます。また、これまで教諭という形で自分の仕事を中心に学校を見てきましたが、大学院での講義を通して、学校運営について考える機会をもらいました。現場に戻ったら、これまでと別の視点で学校運営に携わることができると思います。

学習内容について、例年通りや主観で考えるのではなく、エビデンスベースで検討し、実践することの大切さと、個人ががんばるだけではなく、学校組織として取り組む「チーム学校」の大切さです。

質問2. 「どうして勉強をするのか」と聞く生徒への対応は？

回答2. 現在は、あまり得意ではないし、必要ではないと感じられる教科についても、将来働く時の選択肢を増やすための学習であることを話し、いろんなことを知っていることが役に立つ旨を伝えています。

何か解決したい問題に出会ったときに、それを解決する方法がたくさんあるといいと思います。学校での学習はその武器となる考え方を身につける期間だと話すようにしています。

今学んでいることが、将来の自分のなりたい職業に関係したり、幅を広げたりするので、自分の夢を叶えるために勉強するのだと伝えています。

質問3. 大学を卒業し、教員として働いている中で、さらに大学院へ進学して学ぼうと思った動機は？

回答3. 担任業務をしながらの研修に参加する機会はありませんでしたが、午後から研修に参加する場合、帰りの用意などをしたばたした中での参加でした。また研修中も、他教員にお任せした子どもたちのことが気になり、なかなか集中することができませんでした。教師は一生学ぶことが必要であるといわれるが、自分が学び続けている余裕がないことに気がきました。一度、ゆっくり学ぶことで新しい知見を持ち子どもたちの学びのために生かしたいと考えたからです。

大学在学中から、教職大学院には興味がありました。教員になってから、さまざまな研修に参加しながら授業力を磨いてきたつもりですが、日々の業務に追われるあまり、自己流の授業になっていたように思います。自分自身の授業を見直し、さらに向上させたいと思い、大学院への留学を決めました。

研究部長として校内の教職員の研修で指導力の向上に取り組む中で、個人が学校の課題に取り組むだけではなく、組織全体で学校の課題に取り組んでいくことが必要であると思いました。そのためにスキルアップして、より適切な校内の研修体制を整えられるように、大学院で学び伝えていきたいと思ったからです。

質問4. 「寄り添う」とは、具体的にどのような指導を行ったのですか？

回答4. 子どもの背景を把握し、なぜその行動が起こっているのかを考え対応しました。起こっている暴言が、家庭背景から来る甘え行動であるので受け止めることも必要ですが、間違えている言動に対しては、きちんと正していくことも同時に行いました。

質問5. なぜ特別支援学校の教員を目指そうと思ったのですか？

回答5. 私自身が腎臓に疾患を有しており、その時に学習できる場所が特別支援学校しかなく、特別支援学校のおかげで今の自分があるので、自分も同じような教員になりたいと思い、特別支援学校の教員を志望しました。

分散会場形式の開催でしたが
学生も院生もお互いにとって
実りのある時間となりました。

